一九一四年と一九一五年にマルクス主義の蛇の頭を断固として踏みつぶすところまで進まなかったことは、一九一八年に血みどろの復讐となったのであるが、それと同じように一九二三年の売国奴と民族虐殺者の行為を最後的に終らせる機会をとらえなかったことも、を受けないではすまなかった。

マルクシズムとの怠慢な決算　フランスにほんとうに抵抗しようと考えるものが、五年前に戦場でのドイツの抵抗を内側から破滅させた諸勢力に、闘争をいどまなかったとしたらそんな考えはすべてまったくのナンセンスだった。ただブルジョア階級の人間だけしか次のようなとてつもない考えをもつことはできなかった。つまりマルクシズムは現在ではおそらく以前とは違った性格のものになっているだろうとか、一九一八年のゲスな指導者のできそこないどもはより上手に政府の各種のポストにはい上るために、その当時二百万の死者を冷淡に踏み台に使ったのだが、そのかれらが一九二三年の現在、国民の道徳意識に対して突然かれらのみつぎ物をささげる覚悟になっているかも知れないといった考えである。以前売国奴だったものが突然ドイツの自由のための闘士になるかも知れぬなどという希望はありうるはずのない、実にナンセンスな考えである。かれらはちっともそんなことを考えてはいなかったのだ！　**ハイエナが腐肉から少しも離れることがないと同じように、マルクス主義者は祖国を売る仕事を見限ることはない。**そうはいってもかつて、あんなに多くの労働者がドイツのために血を流したのではないか、などというこの上もなくばかげた異論には後生だからかかわらないでほしい。そうだ、ドイツの労働者はたしかに血

を流した。しかしその頃には、かれらはもはや国際主義的マルクス主義者では全然なかったのだ。もし一九一四年にドイツ労働者の精神的態度がまだマルクス主義的であったならば、大戦は三週間後には終っていたことだろう。ドイツは、自国の最初の兵士が国境をただもうまたぐ前に崩壊したに違いない。いや、当時それにもかかわらずドイツ民族が戦ったという事実は、マルクス主義的妄想がドイツ人の心の奥底まではなお食い込むことができなかったことを証明している。だが、大戦の経過につれて、ドイツ労働者とドイツ兵士が再びマルクス主義の指導者の手中に逆戻りしていったが、それにちょうど比例して祖国はかれらを失っていったのである。戦争開始時に、そして戦争中も、あらゆる階層から出て、あらゆる職業をもったわが最良のドイツ労働者数十万が戦場でこうむらなければならなかったように、これらの一万二千か一万五千のヘブライ人の民族破壊者連中を一度毒ガスの中に放り込んでやったとしたら、前線での数百万の犠牲がむなしいものにはならなかったに違いない。それどころか、これら一万二千のやくざ連中が適当な時期に始末されていたとしたら、おそらく百万の立派な、将来にとって貴重なドイツ人の生命が救われたかも知れないのだ。だが、まつげ一本動かさずに数百万の人々を、戦場で血にまみれて死んでゆくままに放置したにもかかわらず、一万あるいは一万二千の民族を売る者、奸商、高利貸、詐欺師等を貴重な国民の宝物と見なし、それゆえかれらに触れることができないなどと公けに布告することは、たしかにブルジョア階級的「政治」にお似合いのことでもあった。このブルジョア階級の世界ではなにがより勝れたものであるのか、白痴なのか、柔弱なのか、臆病なのか、あるいはとことんまで堕落した根性なのか、ほんとうに判らないのである。かれらは実際運命によっ

て没落が定められている階級であるが、ただ残念なことは全民族がかれらによって地獄にいっしょにひっぱり込まれることである。

だが一九二三年にわれわれが見出したものは一九一八年とまったく同じ状況であった。どのような種類の抵抗が決意されようがそれはまったく同じことであり、第一になさるべき前提はつねにわが民族体からマルクス主義的毒を排せつさせることであった。そしてわたしの確信からすれば、当時ほんとうに国家主義的な政府がなすべき最初の課題は、マルクシズムにせん滅戦を宣告する決意をしている勢力を探して見つけ出し、さらに、この勢力に自由な進路を開拓してやることだった。外敵が祖国にこの上なく破壊的な打撃を加え、国内ではどこの街角にも反逆者が機会をねらっている時期には、「安寧秩序」などというナンセンスを崇拝しないことが政府のなすべき義務であった。しかり、ほんとうに国家主義的な政府であれば、当時は無秩序と社会不安こそを願うべきだった。というのも、それら社会的混乱の中でなければ、わが民族の仇敵マルクス主義との根本的な決算が結局不可能であり、生じえなかったからである。このことが放置されたならば、抵抗についてどんな種類の考えがでっち上げられようとまったく変りはなく、それらはすべてまぎれもなく狂気の沙汰であった。

もちろん現実的な、世界史的重要性をもったこのような決算は、枢密顧問官といった連中や、老いぼれて干からびてしまった内閣の主脳達の計画によって行なわれるものではなく、この地上の生命を支配する永遠の法則、この生命のための闘争であり、また永久にそうした闘争でしかありえない生命の法則に従って実現されるものである。人々は次のことを思い浮べるべきだった。

つまり、血に荒れ狂った内乱からはしばしば鋼鉄のように堅く健全な国民体が生成したのに、他方人為的に育成された平和状態からは、前代未聞の腐敗が生まれたのも一、二に止まらないという事実である。民族の運命はピカピカした革手袋をはめた手で丁重に変えられることはできない。したがって、一九二三年には、わが民族体をむさぼり食っていた毒蛇連中を捕えるためには、残酷きわまるつかみ方をしなければならなかった。このことが成功して始めて、積極的抵抗を用意することが意味をもったのである。

わたしは当時幾度も幾度も声をからして演説し、少なくともいわゆる国家主義の仲間にとって次の二つのこと、つまり、今回はなにが賭けられているのか、そして一九一四年およびそれに続く数年の場合と同じような失敗をすれば、再び一九一八年のような結果に不可避的に到達するに違いないことをはっきりさせようと努力した。運命のなすがままに任せて、われわれの運動にマルクシズムとの対決の可能性を与えてくれるようにと、わたしは再三再四かれらに請い求めた。だがわたしは馬の耳に念仏を唱えていたのだ。かれらは、国防軍長官を含めて、すべてについてもっとよく心得ていて、結局あらゆる時代を通じてもっともみじめな降服に直面することとなったのである。

当時わたしは心の底から次のことを自覚していた。つまり、ドイツのブルジョアジーは自分達の使命を終ろうとしており、もうその先かれらの天職としての課題はなにもなかったことをである。当時わたしの見るところでは、これらの政党はすべてほんのもう競争的嫉妬からだけマルクシズムとけんかをしていたのであり、その上マルクシズムをまじめにすっかり絶滅しようなどと

角川文庫
—3144—

完訳 わが闘争
(下)

アドルフ・ヒトラー
平野一郎
将積茂 訳

角川書店